

あとがきにかえて

南医療生協をはじめて私が訪ねたのは、2008年のことであった。当時働いていた生協総合研究所で、月刊の研究誌『生活協同組合研究』においてシリーズ「協同の実践」を担当し、毎月のように元気な活動を展開している各地の生協へ出かけ、協同組合らしく工夫している様子を楽しく取材し原稿にまとめていた。

旧南生協病院の横にあった事務所を訪ね、大野京子組織部長に会い、そこで伊藤進常務理事と中村八重子常務理事からパワーポイントを使っての詳しい説明を受けた。独自のレジメとパワーポイントを使い、次々と3人から丁寧な説明があった。その内容が、組合員を中心にした生協らしい運営をきちんとしていたので私は感激した。いくつかの施設を見せてもらい、工事中の「生協のんびり村」も訪ね、組合員の力でここまでできるのかとすっかりうれしくなったものだ。

2度目は、2009年の「生協のんびり村」の開村式である。春のうららかな陽気の中で、参加した一人ひとりの明るい顔が印象的であった。

2010年春に定年となった私は、自由に時間を使うことができるようになり、もっと南医療生協を知りたいと願い、自費で頻繁に東京から名古屋を訪ねるようになった。毎回のよう新しい出会いや発見があり、その都度ワクワクしたものだ。

いろいろな方に会っていると100名をこえ、いつの間にかメモした大学ノートは4冊も終わりになっていた。その中から、紙面の関係もあって約半数の50名に今回は登場していただいた。一人ひとりがいくつものドラマやこだわりをもち、一冊の本にすることのできるほどのおもしろい内容を持っている方が何人もいて、どこに的を当てるかで悩んだ。星崎診療所や「生協のんびり村」などは、単独でも本にすることのできる話題がいくつもあり、どこまでもめり込んでいきそうになり、それでもどこかで切り上げなくてはならないのは困ってしまった。

この本が南医療生協の実践を通して、「生活の場で誰と何を協同するのか？」という生協哲学の問いかけと大切さを、一人でも多くの読者に伝えることができれば幸いである。

取材にあたっては、南医療生協組織部の大野京子部長に窓口となってもらい、忙しい仕事の中で多大なお世話になった。また出版に際しては、合同出版の上野良治社長に英断していただき、やっとのことで私の夢を形にすることができた。

取材をさせてもらったにもかかわらず、本で紹介できなかった方も含めて、誠にありがとうございました。

2011年10月7日 東日本大震災被災地にて 西村一郎